

「わがなすこと」

県立神戸高等学校長
新谷 浩一

○ 先月終わりの学年集会でのお話から

学年集会、見せていただくのは好きなのです。先生方がどんなお話をされて、それを生徒の皆さんがどのような顔で受け止めているのか、というのはたまらなく興味深いのです。そんな思いから時間さえ合えば私は覗きに行ってしまう。とは言え、自分が学年団の1人としてマイクを握っているときに、校長が後ろに立って、話を聴いていたら嫌ですね。そう思うと我ながら罪なことをしている気分にはなります。

残念ながら急な会議が入り、1年生の集会は覗けませんでした。2年生の集会は忍び込むことができました。ちょうど安永先生のお話でした。家族にも内緒で準備を進めて出走し、見事に完走を果たした神戸マラソンの話、よかったですね。いくつか挟まれていた教訓も実に印象的なものでした。

「人生を変える方法は3つあります。①時間配分を考える ②住む場所を変える ③付き合う人を変える。このうち②と③は難しいですよ。曖昧に『自分を変える』では何にも変わりません。できるのは①、しっかりと自分の時間配分を見直し、24時間を有意義に使うことですね…」確かに42.195kmを走り切るにはかなり時間を捻出しないと準備ができません。単なる学習の話にとどまらない、説得力ある話でした。

さあ、3年生はいよいよ今週末には「共通テスト」です。部長の木村先生を中心に、『自己実現』と題した進路通信を3年生に届けてくれている進路指導部から、先だって依頼がありました。「今年ふたたび大学受験に挑む77回生にメッセージを書いてほしい」とのこと。出会ったことのない77回生ですから、私なんかより前任の西田校長の言葉の方が響くはずとは解っていながら、こんなことを伝えることにしました。

「わがなすことはわれのみぞ知る」 ～坂本龍馬の言葉から～

新しい春を迎えた自分を想像してみる。咲き誇った桜が風に吹かれ花びらを散らす、そんな季節。君は混雑した通勤電車に揺られているかもしれない。銀色の車体かな、マルーン色の車体かな。いや、山道を歩いているかもしれない。乗り慣れたバスを見送り、少し汗ばみながら太陽に近い場所へ。ふと振り向けば水面が光る。その眩しさに心を奪われながら。

あるいは君は商店街を歩いているかもしれない。古本屋やゲームセンターを横目に、銀杏並木が続くキャンパスに向かって。いや、都会の喧騒に身を置いているかもしれないし、のどかな街で新緑の匂いを吸い込んでいるかもしれない。努力の末に叶えた夢に魂を震わせながら。

そこからは君の道だ。君の春を誰がどう言おうと構わない。
積み重ねてきた過去と果たすべき未来を、君が解っていればそれでいい。
幕末の志士、坂本龍馬はそんなふう生きていたと私は思っている。
今はまだ手つかずの君の春を心から応援しています。



結果として住む場所を変える人もいます。付き合う人が変わる人もいます。そんな季節が目前なのは78回生も同じですよ。そんな思いからこのメッセージを今、3年生に送らせてもらいますね。

ちなみに私も40年前、皆さんと同じ立場でした。経済的な事情もあり、父親から「家から通える国公立大学だったら行ってもいい」と言われ、数学の苦手な私は最後の最後までひたすら青チャートを解いていました。その結果、住む場所は変わりませんでした。付き合う人は少し変わりました。その喜びが伝えたくて選んだのが始業式でお話した先達の話です。いつも静かに聴いてくれて有り難うございます。今回はその人のことを書いた通信を添えます。あんな出会いが皆さんを待っていますように、と願いながら。

いか
「厳めしとも 優し まなざし ぐっと力
子どもとともに 大人で生きる」

高校教育課長
新谷 浩一

○ 7月22日も日差しの強い日でした

その昼下がり、僕は県民会館隣の神戸栄光教会にいました。久しぶりに上着を羽織り、ネクタイを締めて。去る2月3日、79歳で亡くなられた山口徹さんはご本人のご希望どおり、家族葬により天に召されましたが、徹さんの古くからの友人やお世話になった人々が集まり、お別れの会を開くこととなったからです。

13歳で洗礼を受け、神戸YMCAの総主事になられたほか、兵庫県青少年団体連絡協議会等でも活躍された徹さんを慕う方は多く、その日の参加者は200人を超えました。また、平成18年から8年間の長きにわたり兵庫県教育委員を勤められ、退任前には教育委員長を任されていたこともあり、井戸敏三前知事を始め、兵庫県、兵庫県教育委員会でお世話になった方々も多く集まっておられました。

前半は礼拝の時間です。賛美歌と聖書の朗読、牧師からの説教、祈祷、そしてハンドベルの演奏という厳かな時間。一転して後半はお別れ会です。在りし日の映像が会場に流れるとところどころで歓声があがります。それは少年期から強面だった徹さんがいつも中央で楽しそうに笑っているからです。懐かしい笑顔です。

冒頭の歌は井戸前知事が徹さんのために詠まれました。前知事は震災ウォークをともしした話や杯を交わした時のエピソードを思い出としてユーモアたっぷりに語られました。会場は笑顔の渦でしたが、それでも歌が詠まれた瞬間は静まりかえりました。皆、それぞれに思い起こす徹さんのまなざしがあったのでしょう。

○ ちなみに…

入場時の参列者名簿、兵庫県関係者のところに僕は名前を書きませんでした。もちろん徹さんが教育委員であった間、僕は職員としてご指導を受けました。でも、それは僕にとってメインストーリーではないのです。

徹さんとお出会いした時、僕は18歳でした。大学に入学したものの経済的に苦しいこともあり、予備校でアルバイトをしていましたがそれだけでは足りず、夜の繁華街でも働いていました。我ながら健全な大学生生活とはほど遠いものでした。そんな時、教員をめざしている友人から「一緒にボランティアリーダーをしよう」と誘われます。教育現場で働くなら子ども達と関わる経験は必ず生きるはずだから、という理由でした。

「まあ、物は試しに」そんな思いで足を踏み入れてみたボランティアリーダーの世界。子ども達とキャンプに行ったり、サッカーの指導をしたり。そこで僕は徹さんと出会い、4年間ご指導を仰ぐことになりました。徹さんはいつも子ども達にまみれながら子ども達と同じくらい笑っていました。そんなふうにながらに無邪気に振舞えない当時の僕に、徹さんは決まって「笑え」と仰いました。笑えない少年期と、笑えない青年期を生きた僕にはそれはきわめて厳しい注文でした。でも、決まって徹さんは繰り返し僕に仰るのです。「笑え」と。

「子どもに心をひらいてもらおうと思ったら、まずは自分が心をひらかないとあかん」
「そのためには難しい顔は要らん。笑え。自分から笑いかければ、子どもも笑うはずや」

徹さん、僕が自分から笑いかけることのできる大人になれたのは、あなたの教えのおかげです。子ども達に相談してもらえ教員になれたのもあなたのおかげです。でもね、徹さん。あなたのように子どもとともに大人で生き続けることは叶いませんでした。思いを繋ぐことができなかった僕です。それでも、あなたの教え子の1人を名乗ってもいいですか。

そんな思いで僕は名簿に書きました。「西宮 YMCA ボランティアリーダー新谷浩一」と。

